

#### 5\_4 大畑に遺された貴重な文化遺産、『原始謾筆風土年表』と村林源助

室町末期から海運によるヒノ材の積出が盛んであった大畑に、日用品を売り込んでいた近江(現滋賀県)商人の二代目として生まれた村林源助は、初代の父の影響もあり、読書好きで蘭学本や徂徠学の本を読みこなしていた。

その頃田名部に太宰春台と共に荻生徂徠の双璧といわれた服部南郭の門人足羽藍田(あすわあいでん)がおり、その教えを受け、その影響もあったと考えられる。趣味は広く、和歌、俳諧、漢学に長じ、本草(薬草)や天文の書を読み、時には天体の観測を行うなど、あらゆる方面の知識を身につけていた。歌ではかの有名な菅江真澄と交遊するなど、本州北端の大畑に当時の日本文化を導入したといってもいいのである。

真澄が度々大畑を訪れたのも、大畑の経済力と文化の高さのためと考えられる。北前船の上方や北陸からの下り荷のなかに学問書や珍本もあり、長崎文化なども輸入され、源助を中心とする当時の大畑の文人たちによって、文化の花が開いたのであった。

この二代目源助の名は時明(ときあき)、号は鬼工(きこう)で、通称が源助(げんすけ)、寛延元年(1748)大畑で生まれた。東町の村林家の先祖である。

源助は25歳の時、五ヶ月程かけて江戸、京都、大阪へと旅をし、見聞を広めている。また、学問を身につけた32歳の時、藩政期の大畑の検断や宿老(おとな)という町役となり、政治にも参画している。検断は町の取締りをし、夫役や伝馬役の取立て、代官所の令達を取次ぎ、宿老は検断の諮問に協議する人で、源助は山役人もしていた。

文化元年(1804)57歳で公的な仕事をやめ、記録を大事にした源助は『原始謾筆風土年表』を作る計画を立て、病気でも筆をはなさず、死の直前まで書き続けたという。全部で52巻の大冊(現在は1巻と4巻が欠)を著し、大畑にすばらしい文化遺産を遺したのである。「風土」は中国に源があり、自然と人文との相関を意味し、大畑を中心に下北郡一帯の自然と人文を知らせる目的で書かれたものと考えられる。編年体で歴史書の体裁をとっているが、これは太宰春台の『倭漢帝王年表』のやり方にならったもので、徂徠学の影響を受けていたことを物語っている。

「原始」は易に出典があり、事物の起源を究めることを意味し、史実の起源を『和漢三才図会』(わかんさんさいずえ)(江戸時代の百科事典といわれる書)で説いているのもそのためと思われ、「謾」は「漫」と同じで「謾筆」は随筆ということである。

内容は下北郡を主としているが、近世末期の日本の資料としても役立つものである。

源助は山役人をしていたこともあり、菅江真澄の訪れた赤川の滝(不動の滝)を五度ほど訪れている。文化7年に訪れた時、「天明の頃とはすっかり変わり、諸木が生い茂り滝の様子も見えず案内人が危ないところを伝い広がった葉の枝を払ってくれた」と書いている。

源助は文政4年(1821)74歳で没し、大安寺に葬られている。



83 原始謾筆風土年表  
出展：村林一彦氏



原始謾筆風土年表が入っている箱の蓋